

芸は身を助ける

公益社団法人埼玉県診療放射線技師会
会長 田 中 宏



このことわざの意味については、いまさら説明する必要もないであろう。

私が新人のころに教えていただいた「芸」とは、

飲み会での「芸」であった。もちろん、それも一理ある。しかし、ここでいう「芸」とは、本来の意味である「困窮したときにそれが生計の助けになる」ということである。

ここ数年、私の上司や先輩が定年退職をされている。これまで組織を築き上げてくださった感謝と同時に、今後、代わりを担わなければならない責任感を感じる。しかし、同時に自分自身も、いつかはその時が来るのだと実感しはじめた。20代から30代ではそのようなことは考えもしなかったが、40半ばを過ぎたころから感じるようになった。これまでの私の知っている定年退職者は皆、悠々自適な生活をされている。しかし、これからの社会情勢や医療界をみると、医療や検診事業は先細りをする中、同じ時代が続くとは思えない。

診療放射線技師免許以外に付加価値を身に付けることが、私たちにとって、在職中や定年後の長い人生で身を助けるのではないかと思う。例えば、心の専門家として「公認心理師」が国家資格化になるという新聞報道があり、2018年から試験を開始するという。その他にも、これまで私たちにも馴染みが深い、医学物理士や超音波検査士など。このような

資格試験はそれなりにハードルも高いが、決して無理な試験ではない。もちろん本業である診療放射線技師を極めるというのものもある。今後は、一般的な診療放射線技師業務だけで、一生安泰という時代はないと考えた方がよさそう。

これも時代の流れをみれば容易に予想が付く。昭和では、大学まで出れば一生安泰という時代があった。これは終身雇用を前提とした考え方だが、バブル崩壊後にその神話は崩れた。その後、金融機関や大企業に入れば一生安泰という時代もあった。これは日本の銀行や証券会社などの金融機関は倒産しないという前提であったが、バブル後の不良債権処理でこの神話も崩れた。私が技師学校を卒業した後、わずか26年で2つの神話が崩れ去っている。今は、「医療界で国家資格を持てば一生安泰だ」「公務員であれば一生安泰だ」という神話があるが、おそらく10年後には崩れ去るであろう。

私の知っている診療放射線技師にはダブルライセンスとして准看護師、臨床工学技士、司法書士、行政書士など。また堅苦しい資格だけではなく、会社を設立し独立した方や、株のトレーダー、スキーやスノーボードのインストラクター、農業などさまざまな芸達者がいる。広い見識で「芸」を身に付けると人生楽しくなるかも。

さて、私はこれから農業でも始めようかな・・・